蘇明之人娘

五編

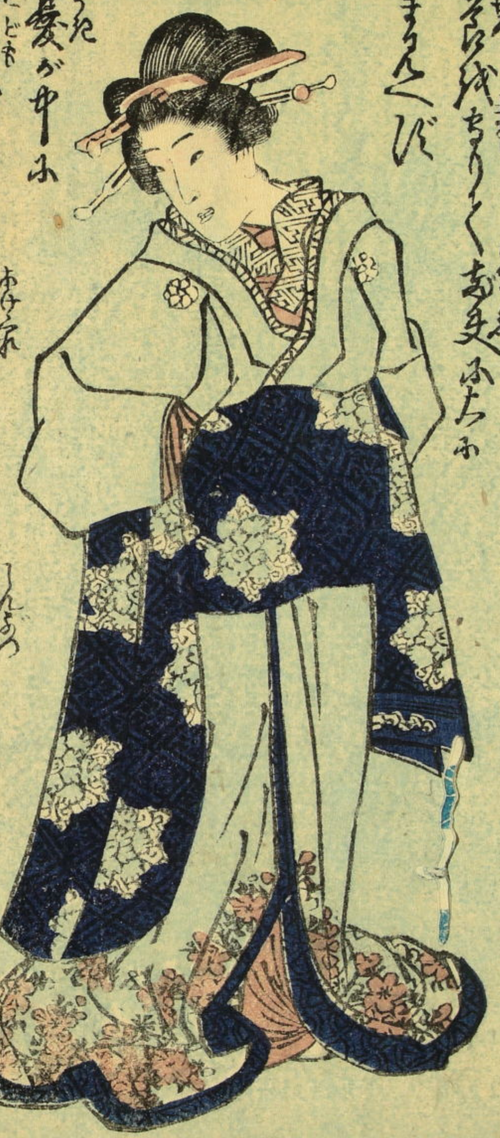
へ 13
3228
5止

へ 13
3228
50
昭和九年
九月二八日
購求

夏も逢ひけりて。葉ふ吐しとる秋を云張。
西の浄土へ渡らせられ。古屋の住菜屋も
困じ罪。中逢たれ僕と代りに出しとて
客人の出仰ハ成さんかゝ歳度の進と
辞ぬ苦界のぬりえり。かゝる世界は事
剃ねハ。西屋もしかもしかも悪ハ清ゝのぞ

眠童伐深ゆるくれて形がゝ。扉り入り板は見
限ぞ。大尾結句巻ゐれハ。此近刻に新楽
ゆゝ中とも鳴呼の葉形ゝ。独俳優に丹情
と。古くさし史の發覚。ゝ遊く此境を
祈りふとしかいふ

毒自言者人記



私情にせまりて家出成るし あさちや
幸若成増せしハ不孝の第一まづれ
若成ちりく あ夫に大に
まるんべし

憂が中に
初児成そだてて且舊のうきにし非紙に稱だて
夫の紙を付しき量貞烈といへざらんや

清深

恩と義理とに不義ならぬ不義と
云解るまして祝をも持て患雅
のこと早愛なりて才娘のうれと
助けて初児を
そだてく姉の
なげれも姉
がりに魚と水
とになせし
など一ト度不孝の
名成負ふとも皇天
徳成照と成まして僥倖多き
身とはなりにけれ

おきね

毬唄三人娘五編上巻

江戸
松亭金水遺稿
山々亭有人補綴

第一回

風吹クバ峯ニコクリ出ル雲代ゴニ有ー名ヂリ北ハ[illegible]
ヌよと家隆和尚の孫ニ[illegible]ヲ孫ゴ[illegible]
ゆると吹バうち過く風ニちゴ[illegible]雲代ゴニ[illegible]方ニや[illegible]
らわと浦山ー風ニ掾先の[illegible]ニ[illegible]大[illegible]
擱云「実ニ[illegible]ニ[illegible]ゴ[illegible]者ハ[illegible]大人や[illegible]

まへ。疾列る兄さんまも死てゐれお絹さんハ。湯州にお左とめ
変るれど。お絹中理屈まも往ぬ。翌日久庵さんのお病
事さへ快るれば荷物に係へて離縁状もまとめる
たゞ居しと不実の良人でハなりしものの我ゆ何にして。かゝる
んにまりつゝらん銀ゆらくハ体云が諸云までハあらざるゝト千
そにてゐる我くぐくまるおりからお民が後から民「コレサまんぐ子
まゝ居に お幾。斗居てたとへにさへ合せものハなるれ物と
いふからモウ要人さんのこゝハ見までの縁とおもゝめて。まぐ

お前も若イまぐらう今の内に身を固る兄様をする方が
宜しやアるいか宮「たゞ居サいつがいつ川と婦さんの宅の所居分に
るつても居るまぐトいつて亦良人を持のも居ぐらいよく
琵琶姫の方が離縁状でも出ましたら尼ちへでも来ませう
民「奎朱ナるまゝ我おいひナ今附尼ちへるんぞ往る庶がある
ものゝ子。吾儕も兄がなるが気仙も志れるい良人を持よりや
いつそ其人で居る方が嬉ごと云つて。今ものゝ所して居る
あれどなりにつけて良人のるいといふものハ所身のせまいものサ

至るお前が良人を持のが否ごと。云やア尼なんぞに。ならば
ともいへ門とも知りてお在ナ留「吾儕も種々氣がりやるから
形いふ附は大きイ姉さんが油斷ふ。お出でアノ通義要人を
と仕ずらく殺ますから御情でも掛さらば亦宜思案があり
升まいりのでもないと故事が久愛に世法代して至て文
知ても往かくし。今お前さんの御仰至り言ふも忘れるい
良人を持のも否なり。いつも尼でもなろうと思ひ升の井
氏「吾儕もお諸さんのるのも思いるいでいるは あくして要人さんとも

お仕ずらく所成からと思いされども亡父の所遺云にも
義母の病氣も見捨て。家出代して不取扱者。月己の
亡後。途中往途で逢とも。口も出なと云仰てもう儀
お目出度お成らしたら。吾儕も逢さんのは出ぐだ。此方から
知て往ては親の遺云に背から知つて義法になるされども
丁度五月が亡父の七年ざらば十四日に取越て法事をする
つりしさらお諸さんも唯に有ぎて亡父や義母の位牌の前
でお供をして吏から往至ひをするつりさ琵琶場の方へ

お絹さんが往さつて。たじまるまい翌日にも久庵さんさへ往
たるもやア居具を引取に往つありに重ちるのごかかモウ去
りさがるいからあれらめてお往舞。たゞしてゝ気にも去れるれ
人を持のこれ居ごろうれどもあんるに伴さんがやしかれいふ
からいいそ伴さんに身を紀せるゝ異腹ゝ世代出すとりいふから
そうでもあるさ方が宜ドやアるのかト咄ー半途に伴六が一盃拭
嬢の手を足伴「イヨ今日ハといひ事ならばかく吏へあがり事て
伴「イヨお蜀さんたぶお世聟の気兵ざる。落花要度枝に

底らばダ戸肩も段が無理無体に往くと三浦屋へ連
て往きて横中呑あるしこの下今日ハひどくん持が
悪い吏に絲織めがモウ五周家の居るれを取知ぜずつと
女房家どりにるつて自己るんぞへ下役ごといふ面つ見が
氣に咎ハ移へ。まさ那呂俗反 女にのろいと いふをるべし もいて事にる間まく
良人家どりの者よち振が。今五ものつり方ト事で。相へお民さん
形してお前達と心安くしてゐると積に隙ゐてあるへらせ相へ
から服気もせずに喝いて来年に姫癡らしいが。一下悦れて

お局
伴六

お民

清くの伐えせつけられさのでごうぎと強が煮てゐる趣
アハヽヽトキニお富さん見から五子へ出かけやせうお民さん
年なしう子民「左括サ雑肖うハこさゐ平がお富がゐんざら
年ぶんが務れませんから仲「往いふ無ざが嫌で別れさ男でも
二百拾さ仏持ごといふから年ぶんの務れぬのも尽理候左居云
時ハ年晴しが第一ざサタく兎も角もウント云てす度を所成
お民さんお前からも進めてお呉でゐくゆち母ア性趣民「打
角ゐん事ハ御のごからお前お前をお持ナ仲「お前ハ手前が

殺せのご見雅お出と成富「史ぢ母ぶらく来ツて見ませう仲「史ハ
雅肖テ姉さんまさりや御宗の稽らぬうちサタく皆度く民「史
ぢ母ア御見伐からむりてお方度をおしナ富「史ぢ母ア御見下さいト
ゑ産伐五ゝ産愛へ来り夜頼着稽ゐ三前へ又も仲六来り見
バ富「仲六さん愛へお出と成ゆち母ア否でごぎゐ升ヨ民「実正ハ
私ゐ入ち母ア入けませんヨ客僕どりハどうでもよいがいふ者ハ私
しがり升から仲「御まり皆度が長くらゐ私ハ出さのごト彼明
かけし重目のら出しにありし刀を見てビックリ仲「モシお民さん

ちらし出しにある刀は大ぶ名作の中うごが一寸ぬれ民「これ
ぜんりキクト出して 伴「コリや鞘は遠いて居るがとうしまく
見をお着出来持のぞ 此時伴六は辞も 民「ハイ史ハドいんとせしが
さわらぬ体也 民「十二見は仲間の人が同じ中見の人をいふ 柳河来て来さ
とりやて飯ケて来ぬこのぞごぶい升 伴「ナント史を自己に
懐いて貰ふ理屈也は性まいか 民「どうでする人の飯ぬ物で
すから取つて見ませう 伴「何卒な居して下さ礼は志ゆり致
申て此時な度断とのひ 民「大きにお待どほとくりキさ

伴「イヨまたるゝ亦一段英しくなり申さ事出かけやせう
民「お供いたしませうト下女に留る居を云付て表へお民に
引替てお前は兎角進ま称じ寝ないなまんよしも取く結に
今しも伴六が刀をみえてのおどろきは史かあらねか何者にも
也へよそあらめたはよくバ彼が面代引らんとおふものから
いさくと三人連立出性なり

第二回

お香姫木綿のうへを附ちト菊屋治源がロずさみしは王子の

神社東光院より万福妙意のみ香絨出せり諸人のみ香絨を不大喜に業門せざれば弟子に祈に調合する茶絨あるゝ余が今に大変に唯多絨めて此附書の吟あり

見开ハ鬼まれ角もあれ此神灵雅彩なるに梅花の辛端不可思議なれば其絨を遊び来諸引も切ざれば門下の酒様彩絨なるべし此も繁昌なり中に海老屋と帽扇屋と唯なる二軒の酒様こそ茶にハ飛鳥渡にハ湖の河流のよし有とも此るに今るの祈りなく

客の絶なれる紀中にかしこの海老屋二階にも彼体六が三人連宅や女中の祝儀さへ手筆とみえて お客なく殆に出する女中さへ何なりしん安にハ居ば亦彼方なる扇屋の下座愛にハお猪。洗染。桐生の藝即洗染が父後たる老松絨さへ健ひて今るしも五年迄猶ツ此扇屋に休らひしとぞ

紀者曰

是より下二階にすけ上の階ハ海老屋の二階にて下の階ハ扇屋の下座愛なれば是にして讀めく

屋二階の場
上より少紙見屋し
まるまるぐ

仲「トキニお富さん先刻屋でも
いふ屋り尾ふなろうの一生草
云をするのとこそ絵世界を云
祿へ下く自己の女房ふるん杯ナ
た屋すり無し出る中から婦様
まも云ふ此ハモウ二本差ハ止ふ

屋下座愛の場
ゆより上へかし
見ゆる

後「花時ぶと云ゑるがらいつも
五子ハ繁昌ダナ 喜喜さやう「花屋でムイ
升是で舟が自由なるゝだ
大造ナものでムりませう 結「ごいぶ
お焔が手首取手 喜喜「変らの
女中ハさうでもなるろうが少し

して呉服店代出し世を来り
立べ沢名跡もなるから清屋と
でも何とでも云うド無祿へ
ナヲお民さんお前も何とも云て
進めて呉ン杯ナ民「吾儕も様々
私めて見ましたが老角要人
さんに来練が称て居て矢ッ強
尾ふなるゝと云てゐらまるの

端末へ来ると花なら老
時ぶ。中とられて来るのがなる
から。そんなのに出ッ室せると
性生でござゐ手 結「イヤモ一季
半季のなさ人ハ南ふなるい
のサ 後「イヤモ一季半季ト
云べ見をこる河ニハアノ源氏ト
云なから浪深浅見ゑ居り 後「浪深が

あれ子の身ぶりが有ません
伴「そこが婦の役ぞ一生分の
かさまることぞから美人成出るが
宜ぢゃア通へかお富さんいつに
お前が惚まて居さて先方
ぢゃア振向くゝ見る気もなく
こゝ独様も然れぢゃ此方ホさへ
もに仮気より背がなき事一

不可法といひながら見を連
出し途中から合成あて烟
にありまぞこそうへに月色どのが
親室代と云話でいるかれど
たくから持仕へさカート便衣
度たれといふ云れるのが見も俄
に失ありて居りや不深しが
仕業でいあるまいか 結「夫も何と

所にでもなるわりといふ情合ぞ
ものゝ成いつこおまへが麗くと
一人で二人の苦労をしてくも
押付通へ支より無く交へ一歯
牛に馬成案留て。ウント
云て自己の女房にるん通へ
たれすり無ア自然と祝の名
跡も立といふものぞ罪不孝

もやされません 丑「あんぢのゆ
に嬢様も浮雲測へ沈とあ
要人さんの四伝切亦世八さん
のお骨折で 後「実に先方
の四伝切ハ中く仇恵えません
こゝに浦屋と云ふに浮深が居
ことハ愛にもぞんぜねど人足
怒き廓のことりや娘の子

より大イなるハ[illegible]といふ不身一
孝[illegible]も立といふものぞヲイお
留さん。ヲイ。ヲイト云ながらその
侍様に寄かれば[illegible]ハ口情サ
ゆるかさるく秘伝あるへて呉ぜ
ト[illegible]へど素ハ兎も角も今で
も姉の掛人[illegible]姉も[illegible]
にひ[illegible]ねぬ裏をもうけ

がりが志れまいけのでもあるか
ろうと此喜右郎があちこち
と捨んでさがしてもうちに之
浦屋といふ足が[illegible]
ばお[illegible]さんのお宅と[illegible]
お宅へあがり喜右郎足が[illegible]
光をいさゞいさとの[illegible]て咄し
不孝ナ子[illegible]丁[illegible]ト[illegible]アが

しと[illegible]ばかり強くも云ぬもの
からに情涙[illegible]の[illegible]に
吟[illegible]「[illegible]切ハ[illegible]
[illegible]が[illegible]人に[illegible]
に[illegible]ませんかモウ
[illegible]人[illegible]持て[illegible]
の[illegible]ナ[illegible]
[illegible]て[illegible]ナ[illegible]

業[illegible]し[illegible]て[illegible]
久[illegible]で[illegible]地へ[illegible]
武が高いの[illegible]
ても[illegible]大[illegible]
落て金も[illegible]
ござるまい[illegible]親父の[illegible]
不[illegible]
[illegible]ともか[illegible]

此来に良人を打るいのが其君へ
心中 伴「なるかど面白イ年の
門を遠ふごろうが自己なら是
にして遊て其後良人を持
たらば留「史」そ其君の御様か
伴「急度と詞に遠ひはあるまい
お民さんお前も婦の役ぞ後日の
詫人になるごろうの 民「仕方がない

どの事ともお世話をいやさ孫が
なりませんが御説の事あがな
い身の上 染「どういたして婦さん
でも兄さんでも誠にお優しく
分別して下さるので君傾き
素より此児が仕合でかう升
後「小児といふものは我子ぞくも
お無に小塊ものト綾太郎を

御詫人になりませう 伴「さうなく
も事なるめへトいふ打女中か女「もし
お湯が明ましたが召ませんが 伴「お
前がたはどうぞ 女人「マアお先へ史
伴「史ぢ事お先へト女中か無門
に風呂場へ至る廊下で陳の
産愛をいちらと見るよりびつり
なし 後ち馬と小染のこまでお結
再ならば陳子の蔭まで之へ

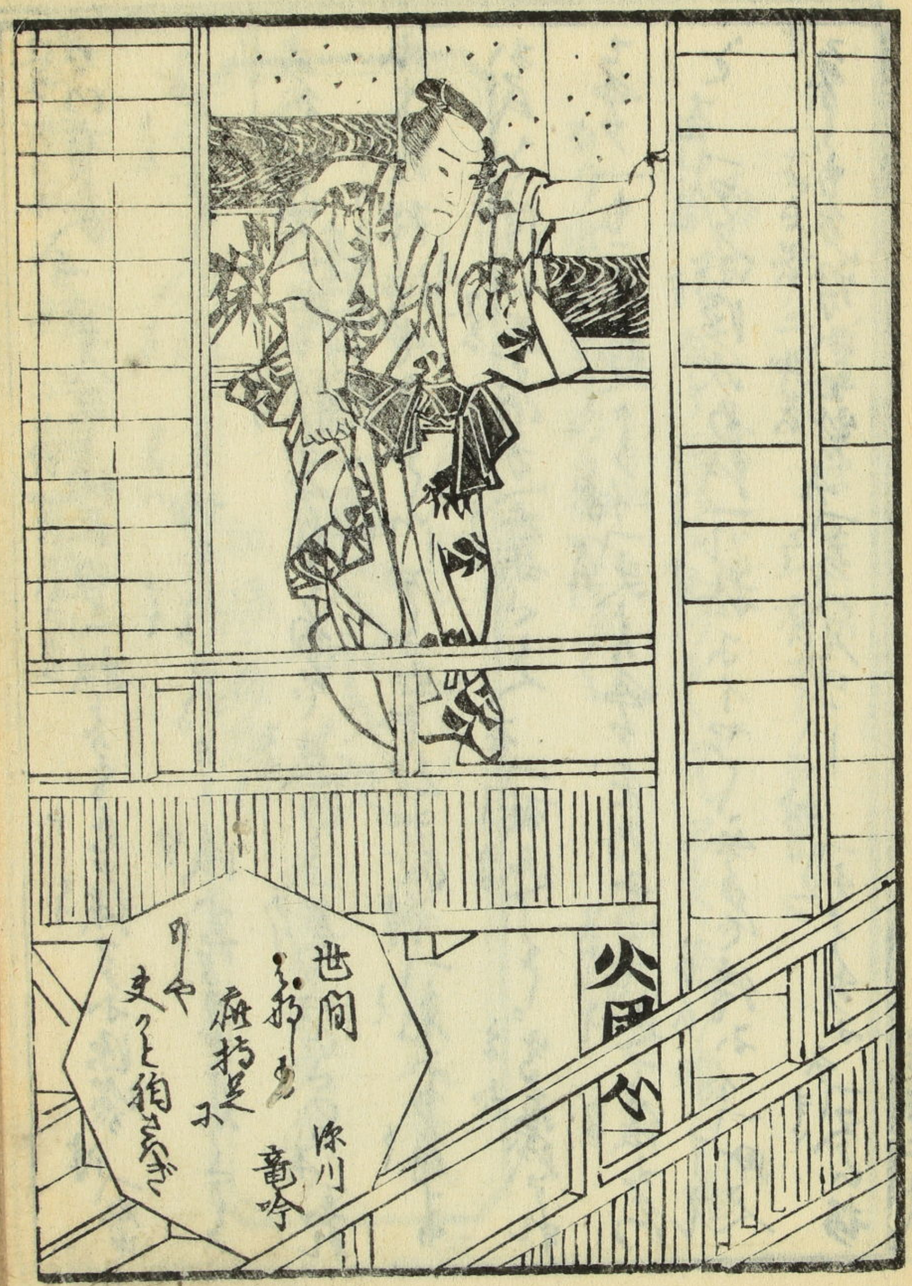
彼法深が抱きし小児を見
て あや「まいく傍がお服見ぞ
此ちりくとおいた本表を即
居の生れ其に其の身を傾
嬉ゆに見せたら史ハし無ぶ
とでござろう・コリヤ爺に抱ら
ねる・アハヽ あらね 親由へ否と
見ぬると云つゝ之を見

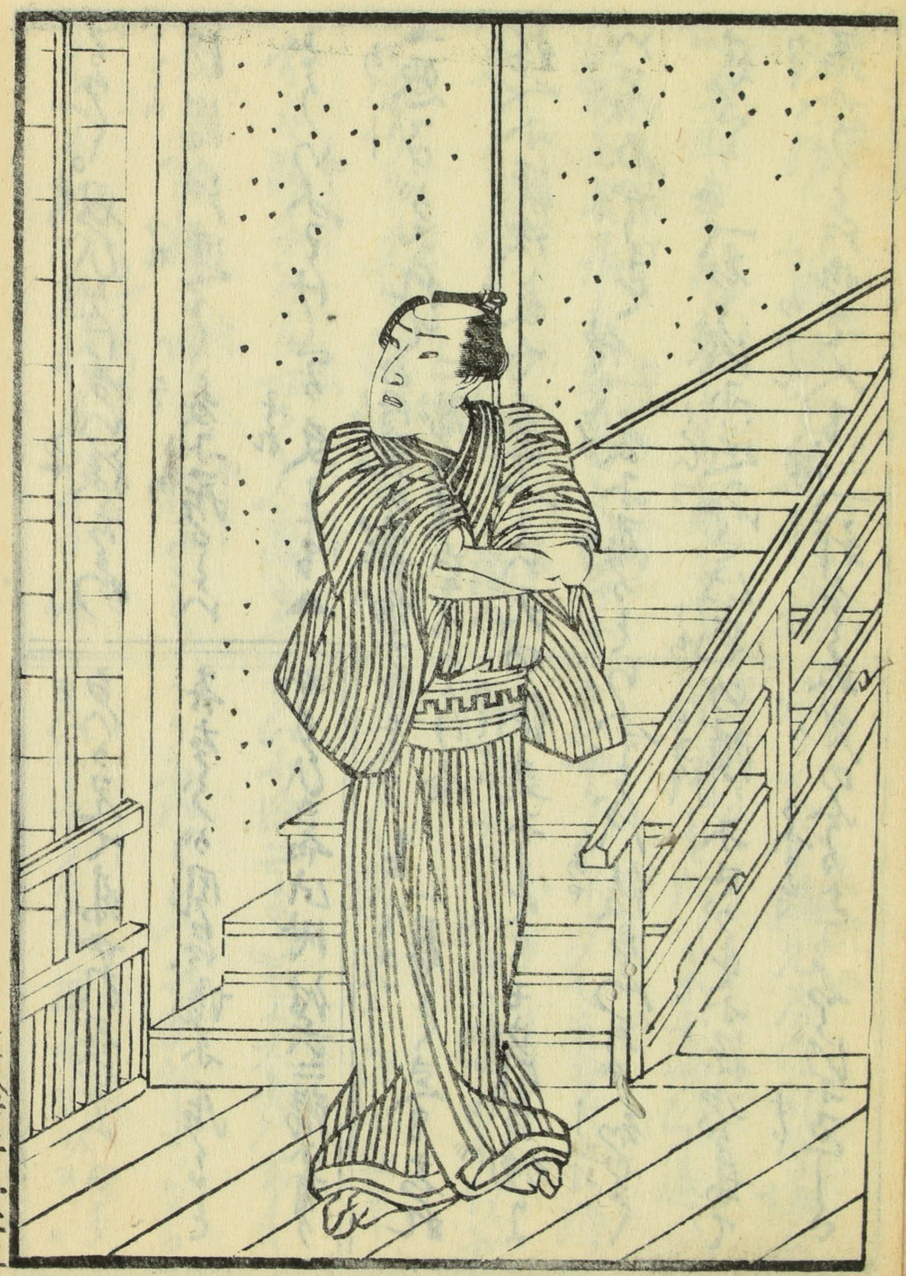
続ハ後ちつ家族を連我を捕
へに出さうと兎も角にも
此所に出居は無用と風呂に
さへよく温まらばあがる二階の。
てありから又も隣我能見るに
今は隣子を立切て人隣ぞに
も見へざれど怖りし様子にも
見へざれば厳持足の事体

ゆりて今海老屋の風呂場に
往詩はたしかに小源次に遠ひ
るいせうもト呼て来たら崔踊
ほ 来「十二小源次が隣のうちに
後「コレくめつさなこと我仕出す
まいに源二ともせよ大也我若も
からこれ。うつつに手出しなる
まいトからそうと思て史が开で

ゐるく。思ひがけるい後ちつ
濃深我連てく夜に居るとハ
どういふまけざう史とも▲
▲悪るのがだれて 此時隣の風呂場に来たら 来「尋ねくさも忘れ
二階に伴六十下のかけ合
稼へ小源次夜で逢ふとハ天の網史にしてもモウ風呂場に
ハ居ぬせうまで 伴「夜に居るといふこと我綾ち局わが知らく
来たら 来「志らばに遠入さは宅の隣 にさが也に源次が来て
居せうとハ出て人も 伴「神なるぬ身の今日とも志らばに通しさ

るいか見て来れ畏まつさと
来たらが風呂場に居ると
おもひきや此時伴六二階に有り


世間
深川
竜吟



刀の有家 丟「そんなら後前の長船とかも矣ッ法アノ不源次が 伴「ゑ氏
んだ刀ぢく人を殺しさ場で捨てゐ。りし後にたりが惡くこう
上衣へおびせる横がぐれて面で更から足がつゝさのか 丟「志れ
ぬも居れ侍とるつて門から出ます 伴「兎にも角まも
お民をこほし刀を此方へ奪さう人 丟「夜迎しさ。宮飛綫され
ちまア一も二も縁へから 伴「更より手ア毛居に今隔遠て後たり
と 丟「アノ不源次め綫一ト掘にイヤく無事で待に 伴「町人
なぐらも多勢に無勢 丟「夜ハ見のがし 伴「もうちに 丟「又よい故

も 伴「だらす工風が 伴 丟「有そうなものだ
気戯場なら思ひ入ありてぐれ出しともいふべき場
なり世文中の色へ清ぐく

鞠の由來

春色延命袋

山々亭有人著
孟齊芳虎画

初編二編近刻

毬唄三人娘五編上巻了

揚太真遺傳

處女香

一細一

精製桐の箱入

そもく和御菓は幸賴女郎の如方にて男女に限らず郎の魅とうるはしく
して生まれ馨りても寒かくこれ絵に色を面じ桃園細にする功能あり志ゆ一
ならじ郎の菓世間に多く白粉洗粉化粧水を無油菓など紙裳して
皆ことごとく郎の菓は入りたまはしむれと功能書に志すしてその書付の
半分も功能は偽にして法被衆と法號してもグールの法は上なく看消
すしまふべきことなるべきことなるべき方程に無味なる菓にていられすく 只一段
見いまふても忽ちに功能の顯まる如菓なり一回り見いましてに法郎の

賣弘所

[illegible]

書物兵繪入讀本所　江戸京橋弥左エ門町東側中程
文永堂　大嶋屋傳右衛門

毬唄三人娘五編中巻

松亭金水遺稿
山々亭有人補綴

第三回

緒も伴六喜ばせ御ハ獨ヘどく清ぶ母紀て右と左に別れしが
伴六ハ名ハ山尾に長居ハ當ハ思ふのから「イヤモウ御ゆるい
湯で都て風物代引そうだサア帰りやせう民「丈小ア君儀たハ
お湯代よしてお服でもいでいて伴「日でも暮ると君も寒づかハ
しい服ハまさを取て唸う疾ち度を殺起ハ無くくと世を立

られお蜀とお民バ其縁代あらばといへど伴六がいそくに
つれて服も啗せばお度そこく其隙に伴六此家の拂
をなし兼て云分並さりしや辻駕三挺持来れバ続とて
史に案移とつゝハ出て行蔭代隙子の透より各伺ひ
結「先へ往ッて三挺の駕ハ吾儕の婿先のが池の端に居るお民様
のが其屋敷へ乗ッて居るお蜀でムり平 綾「夫ぞハ笹田様の江門
室蜜へ揚ても駕の中也へ室周に志かとハ見えとれぬがなるかど
宜江黒屋 深「左様して見まするとアノ蜜のをりて駕が小源次で

ありませう 表「風呂場と旦那が社仰と故眠イて見ても人居
ばなんでも二階で獨云代云ッて居さのが小源次に遠ひハないト
重がついたれども二階ハ見へば候笹田様の江門室と一所に来るのも
ひとつの不思議 深「是ハなんでもお民さんにお目にかゝつて江様子を
喋さう理屋がまりませう 結「ト云てどうも今さらに婿ながらも
お民の宅へ往に往也ね吾儕の不孝 綾「なるほど夫も江都夫
ドサナント釣致ませう お民さんにも十四五年逢ませぬが見ば
あらばといふ自己でもなし自己が乗ッて様子代吟味お話さん

とも素くの姉妹といわれるゆゑに志たいめの法楽が江恩送りとハ
往ませどもせめてのかに十が一ツの恩わらし 結「まあ礼ハあちらこち
ら江恩ほうじハ吾儕どもから致ませ様ばならぬなぞおとゞかに。お
まへほしてた居致していてければ非有ぞんぞ 喜「そんなら恵に世足で
後「イヤ史でハとヨツトに源次が居まいものでもない様に翌日でも出
迄ませう史もた居なり要人仙にお迄に成てお仲をしたらう亦
要人さんの宣忌にも有ませう 結「まに源次ら云仁がお富と一所
あるからハ 楽「ひとりと迄てきさんのお屋敷にでも居るのでハ有ます

まいか 喜「そこの和もたらられません 結「史にしてもきさんハさらばりお出が
なんのもふしぎ 楽「大きな江用多なのでムりませう 後「そんなら此方
も出舟と志ませうコン喜たり加ゆ我二挺云射て異りや 楽「吾儕だ
るらぶらくと歩行方が宣しきりムり 結「実正にお駕にハ及
ますまい史とも若君が召ますなら 後「自己ハ不しくもないが子僧
を抱づめぐハ 喜「自己もおもしろ始りをいたし中が史ド世ノ一挺中
付ませう 後「史ド世それが宣ろうト実に評議一変して駕を
云付拂戌漱ー新堀端なるお猪が家へおのくそ日ハ帰り

ほしとぞ○恁てを翌日後たつはお民が家を高倍べ父が代り
家業の助となりし後たつなれば急ぎ出迎ひ産髪へ招し茶烟
艸盆おもてなせつゝ一刀己来の挨拶終り後へ疾りお給ひさ様ば
ならねてけざが竟く手前にも聞けて故外出無法民「どういたして
手前よりお給のお手筈でも差上ますなれど何をかも女の
手一ツ様に老右衛門が横死なりほして種々出損もお掛
ゆてなり後へイヤく横もすれば徳もするが高人の老衰足
どのハ年来の兵引アノうゝ横成しても利成えた方が多さ

分であろう史ハ老も角も此度自己が年ゆたのハ他でもなく
定めしお母及びもあろう娘の洗染不取なから家出成して
すでに如弟ともなろうといふ義妹子の史合要人様に救われて
今ぞハ姉子お絹どの方に夜界になるてをるといふ義手代の
老右衛門といふ者が母どしお絹どのも遠くさうな。急ノて聞いて
那くことは母が無理にても無れば お絹どの由史婦に礼も
云はし有様ハ初孫の報も見えたし前一時月出府志ましたし
民「史も老も老右衛門が不取なから後「二十男ノ者ハ有るよひ

彦右衛門とのゐる仙合愛史婦迎隠れをしるいでもどうとも出し
の附る我等イ者の後前見ば要人さんに出会ばハ憂河外
に沈む不要人さんも江戸年と取りつたが行かに来のつて江仁
ぢやそうな姉子も仕合ごの氏「仕合でムりましたが流深さんの為
入さこ三浦屋の勝様とりいふ楽情に見えへられ丁度今月で
半月ばかり竹方へ来つて居りまト彼付六が云しことお民が仕
ての掛合久庵いまだ不快にて離縁帰我取ざることさ落も
るくあがされば後「ヤレノ〳〵史ハ気の毒千万お前の出しとお猪さんや

娘の出しとハ大きな御遠慮に行ぞ入組ぞ子細がなくてハ
ならねたぐ臣てお留さんハ氏「只今入湯いたしましたから身仕
舞我いたして居ます亜江様投銭ーまアノお留やト作に
愈じて庵我をそろと明りあ手我つく 写「克とゐ入ました
後「久しく逢ねうちにうろくしくお成になすつた時るお二人とも
駕のうち我おるんかけやと写「左右でムりまし 今竺とも存
ません史ド母ア其居も夫ツ法王子へでも後「お猪さんと娘我
連て王子へ来請帰りがけ扇屋に居ゆたらば駕でお帰りの

名栄あれ
ナアや
おまへもとしを
まるでのがれる
ゆじや
なれ
岡本
重山

丞をば一寸おるんかけ中さだから今お民さんのお仙しで取ろさ
がヒヨニナるので唯此心死であろうが是日自己が要人さんに
お目にかゝつて何や彼のお仙し我故ようから必ずくらく名ひ
よさんなそこで。自己が今日来るのもお民さんに見くでお伊
中さいるのがある。昨日隣の海老屋に居るお前の連の侍
ね。嘸に坐て此様か此ぞんドないかあらるんが。あれが私前
石結さ手代流深我だまして連いでしさに深深とい男
ト関ておどろくお民にお前民「そんなら戸伴六さんが後「さうし

て今ぞれ何所に居中。第「只今ぞれ吾儕が居ほしさ要人のいそで
組下同様後「さうしていろ頃お屋敷へ。第「さやうさ屋敷へ来ろさ
のへ断く一時直の八月頃でゝりましさ後「さうであろう
家出我しさのが七月六日民「屋理で此ら恵にお湯からあがつて
来て坐ろうくとあれて駕で坐りほしさから史ド母を君のお立
の我君さに相違ごぶ為ません。第「弟一吾儕が不審でなり
ませんのへ子づか十四二人投持ぐら為の取前ぐ。むかしの
お役徳へありませうが金をひの荒いうへに武士我止にして

呉服屋代出さうるんぞとゆて居りたれ百あぐらゐの金でれ
出来ねたぐ神に奉さう四悪が後「そりゃ夢路がるいとも
云まい神に自己が所持の刀これも矢ッ張に源次が盗居りた
に違ひいるい是とても仮前物捨賣れ　さ所り二十あや
三十あにいるる代呉物　民「ハテ左様を仰ば長右衛門が死骸の
側に落て有しこ刀まさうの時は詫授にはしく仕業そ
盗さを伴六が所る見付て是非とも賣て呉ろとゆ
ましたが是者の刀で味我しめ利潤つまりか何にしても

おかしいとぞんじさ故人括の部り物と間に合せ我ゆて並
ましさが後「まち刀を為渡見えたれ物ぞが　民「お女出い以用と云
るがらうさへの筆筒の引出しより件の一下腰を出せい　後「や
コリヤ疑ひもるは自己の差料是が死骸のうちに捨
て有さといふからは長右衛門我殺しさも源次の仕業
に相違ありまれ　後「めつさな変も云ませんがまち刀をみたさ
時の括あといひ十手のあるうち七八らは　後「奴が仕業に違ひ
るうろう丈についてお括さんも終しさるのゐ違ひから家出を

して目も鼻の間に居るから姉妹の切通ひもせずにゐるを
己父や義母が後立の遺言でもなかりるれど背別深に後
ちつが佛へ俺を殺よう程に多用もるゝ姉妹のことお俺の
名をもする事に殺て貰ひたい民「丈ハ〳〵は信切に能有ぞ
んじ申全体五月が親父の七年でムり申ゝ此十四日に夜
戦て法事我殺ますつもりを時姉の方へもあらせ親父の
位牌へ俺をして丈から往ひもする様りでムり升さが
此ならぬも君のあれかひ佛も否ハムり升まい只今からでも

明るでも吾儕から来りましても後「イヤ〳〵十四日と思ハモウ
明後日をりやこ時でも遅からむこと先丈上に要人さんにアノ
伴六が小源次で刀の行立落も形くお猪さんからでも吐して
金う民「丈が宣うゝりませう我てハ中々迄ましたが只今から姉
の前へ法事のる我中てきうとぞんじた所が吾儕ハ事より
お留さへ先方の名前もあらるゝからハ甚だ迄入申がよ
笛我を本お届我親ひたい物でどぶ力申が後「丈ハ
何よりお母をいこと丈ぶ我をおほ笛我いこと以て お順と

いにしませう 弟「マア宜しいぐハ。ごぶゐませんかモウそちこち。四
時からでござんませう 氏「ナニ也 此乾老ハごぶゐませんが お湯
漬をまゐ度いにしましたから 後「でもなろうがまだ種々あり
居もありますから行き亦明後日ハ月已も来時致
ませうからこそ時お目にかゝりませうト亦止むるとも関
流し足だ事にとそ頂りなれ

第四回

「如房出さぐにアミしも切まぐ姉やりとでらじたい 女中「あん

とうに居れるんでもヨウリ 後ちこ「モシ君さんお前様病に出
るんしたのか様へ 君「候我つ死れ様へ誰が病るものか 他「うまく云て
お出らかヨ 史ドサア今表病変で呪いた都く逸我おまなまし
たか 君「ウン咲さのヨ古ノー文母ざが宜の今のごの。りもちがれて
垂ぐに死れぐこうくるんせうに化て出迫 様といふナア実に
人情我うがつたりのヨ 他「史ハさうですが今お前さんのお咄しの
は閑室のかゆハ実正ですか 君「候我つ死てもはじまうるんだ今様へ
他「史ごろてもお前さんも不断月已が宅へ来て一所に来ようとく

宮僕があるから出されさとお家さんも根なませう世界の人も
女中丈女房残出さして楽辺ことと吾僕がいるく云はれる
分不要な世もいとひは志まるんが一家中のお取志ありを
お殺さ成お前さんが人不知はれるやうなことがあつては矢ッ張吾
僕が思ひの程ぎ因也書「なる程お前のいふ所も也亦自己の
身にとつても勿体様へ不ど嬉しいが男と生れて堪忍のなら
様へものが二ツなる事一ツは人中で呉我をひとつめてられるのと
亦一ツは女房の万男 後「夫とても見が新ごと手代を以後

新成さのでは有ますまん書「手代は見様へが鑒定で左右
だろうとおもふるもなるのヨト 此世のうち新造 陸奥の外より 「一寸楽情返入
ても宜ざんせう 後「宜ともく そんなんち要なんコ 新造「アノ書さん
以見るんほしアノお結さんがお出るほしさ 後「モシお結さんが来ほし
さト書「お結さんが。なんざう遠のもるがするんせうぎ 後「いゝド要
有ますんか 書「左右の夫ド要度へ呼れへナ 後「夫ド要後の声なん
お結さんを呼ぶく異る酒 声「ハイト返回てけさうしが引返
つて彼お結陸の残明くく小獲残ぢわ 結「以見下さの

まし旦那悟附 舞情今日ハ 君「やお猪さん大きに御法
をいたしまして 猪「どういたして吾儕からも御尊やたづでござる
ましたかね幸惠やよしまして 猪「サヲお猪さん夏へお出なまし
別に御大儀取ませんから 猪「御免下さんまし 吾儕ハ旦那
様に是非今日お目にかかりてお伝しやうとぞんじ
まして 君「それにしたお前に逢ひと思ひて居たのサ定めて
此しもお望ざあらうが お前のまへ御事云ふくいが此の端のも佐
分利様へ代呂物ごの 猪「吾儕も久しく逢ませんが中く

幸性ハ勝て居ますから 猪「そうでなくツち御事お一人てさうし
てお身子儀取ち御事お在らしませんから 君「夫故月色も
賣てとゞ御事賞詞で猪云ひぐと宣るまで云たのコ定めし
お前も親身のことだから気まずい男ごぞらねハ思ひておいで
だろうか 猪「どういたして旦那様のお心持ハ清楽さんの一條で何
も彼も分解居ますから為者儀ハ無理とハ存ませんが其遠
行遠ひでも君にも御立後をおさせ申し お民の方でも為者
をばお帰申して居非理屈可愛そうなのへお留だろう

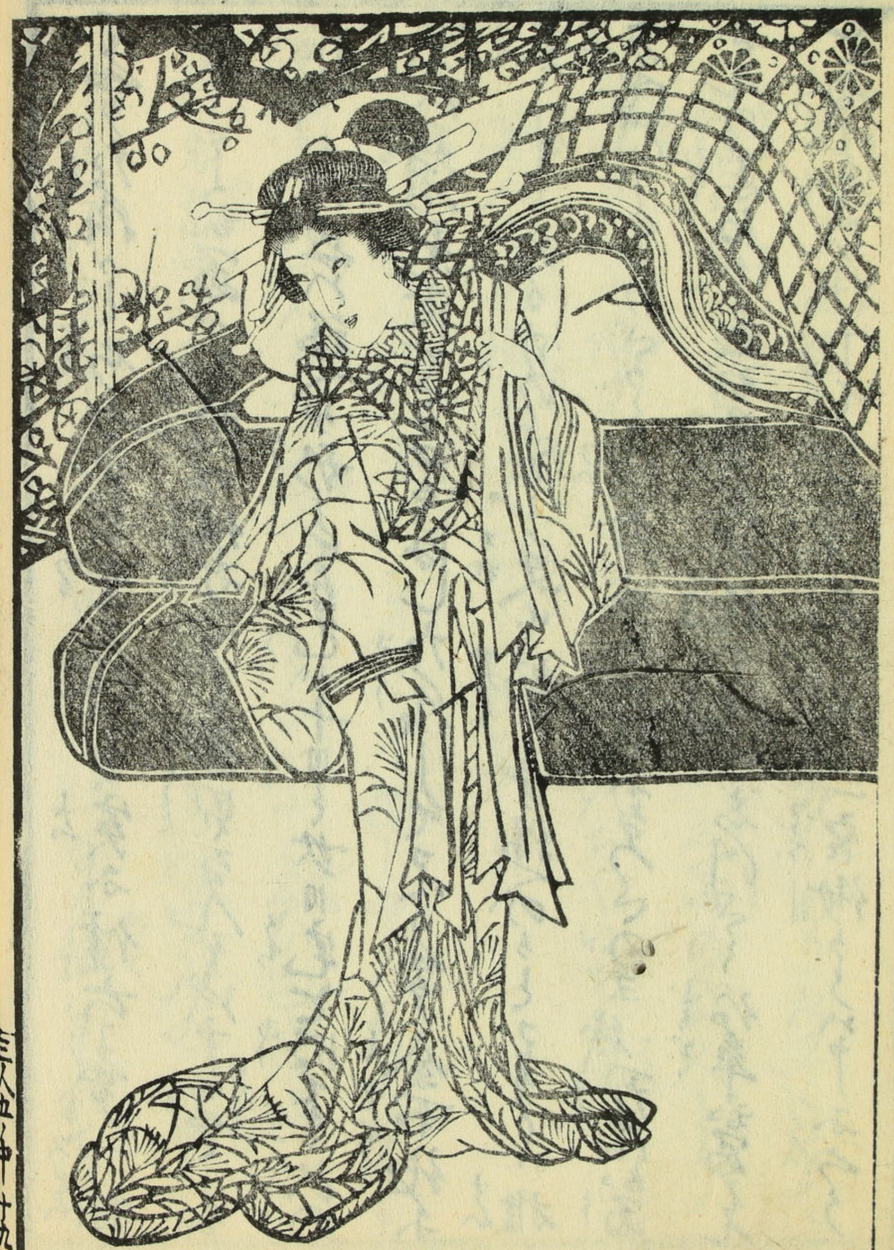
今も夫を君さんにお仕しゆて居ましたのサ候ても君さんが
君僕を呼て来うとお云るんせからお家さんがお宅に居さう
して左衛して君僕が行のなら宣ざんせが江戸家が出さ
臨へ君僕が往き毎ゟ行たら法でも出させうに志らるん
仁ハ忠ひ市から見惟とも お家さんを呼して お呉るんしと
お粗中して居る前サ夫に居るんの馬鹿らしへ浮々助とらいふ
のハまだ十四五の子供じ毎ゟありまるんが思案の他とか。いひ
外がまさらお留さんだらてそんな者と情会ける音書ひも

ありますまん 語「夫に八種々咄しの有中ことと
語「辞に老ち印伐数したお子が大きく分解ましたト
見より彼伴六がお民の家に取りてお民に高尚
を送りお留伐取持これと頼じるより要人の君が伴
様をしたらん為伴六に密男せよといひしと又伴六
も其以前に源次とかく綾たつが下僕にしたく
里来る様に法源伐連出し金伐奪ひて去りしを
老ち印を数せし例に有し刀も綾たつが差料して

同時に失為るせしまゝ亦五子にもくありたると頼て
伴六が身の上にかゝりしことなれば民お富の家人より
後ちに語りしとゝ見ゆの侍伴ちくいちに咄せば
要人も御機も呼ゝ毎ゝに歎息し
御「たゞ伴でもが祢へ宮御なんざ人相とせらはありませんが
どうも伴六さんは一ト癖ありそうな仁ざと思ひほどは。ざから
先刻も君さんにお富さんのうまなんぞも伴六さんの仲口ド事
なりませんかとゆゝしくゝ為ざ御事 君「なる程いまれて見

里事たゞ伴かと思ふるも有れども実に伴六に事一杯
喰ひ事よお富が不所の仕方でも密男なんぞ残すなる
相生とは思へ祢へが形して自己が十日と女日宅を明ても其の
一度悪花形をしさるもなしたゞ伴して見り事余和他に
来しきがあるものごとく更で妬も事祢へのかとうるく推
なる代しさものごとく絶あくいふ分解にあつたのヨ 後「たゞ伴お富
さんの恵白も立お前さんの相も嘆さ志川ごと仙華お富さん
を咄してあげゆてお呉ンなんしな 結「宮御ならはゆにふう

待も待ちしが
別れもいつの
夫婦ゆめなれ
此苦労



ごさゐ下が何卒お願ひして 雷「まご僥倖久庵が病事
でゐるので荷物も其儘玄関さへも書ねてゐる上への届
も粗のこと同勤者ゐも咄さねてけ丈ゐ子細ハおしもなんが
お前の為ゐハ現在身お前の為ゐハ兄の歌お上へ願ひて此仕
並ゐなりさへ出り母ゐ丈でいくのゐ兼て法深の頼ゐゐハ
歌が表れさうバ一ト寺刀なりとも服ゐさい兄相も付ハ物を忍ぶ
ゐさとも有さゐれど丈ゐの咄しハなりつさゐ 話「云儀ゐり法深さん
ハ兄相伴討伐者そのお里丈ゐついてハ宮僧も其者ゐ願ひさる

もなり親ゐ不孝伐しさ替りせめて身の仇なりを討てきりさく
存キ丈幸八も唯今ゐてそ町人とハなりさがりましさゐあれ
でも武士のなれの果 雷「はじめて笑さ幸八さんの素性そん
なら此前ハ武家出ゐ 話「人ゐハ法むるなれどもト兄より
初編の題なるお話が危罪伐救ひんと人を事めし條より
家出伐なしく年月の患罪幸苦伐拘ひられバ 話「宮僧ア
おりつぞ貰ひ法伐いたしこおさ吾僧ア亦お前さんが幸八
さん色へゐ聟さんでも嫌ひて家出をしなほしこのごとなれ思ひ

切て居さしですヨざが実にお前はんハ和母しい心持ざまを称へ
君「自己も風ハ泣中さ実にお前ハ貞女の鏡を妹のお寓
也へ嘆く鋭ひさ。晴中さそんならいろぞや浦州で荒淫に逢
娘を助け人を殺しさ侍ハ幸八さんでも時の娘といふのも
お前さんか。そんなら幸八さんハ其以前大江家の備中で安
田惣之進といふ仁の四子息ぢ夢様へか語「とりして幸君か父
それを見まハ稽く入組ざ咄のあるといふ安田の四子
息ならお目にかゝつて咄しさいるもあり見報

とも近る話出やたう。そうして歓伐討うといふ事つぎでも
相つさのか語「史ハ明る春分の年回を勤るに付お民もお寓も
寺へ参て相談を致すつもり史にしても只相信の四鋭意が
晴さのをお寓に咄せましさらば此事ぶるのでありませう
弟「皆傲も史で案法して重荷我おろしさ安なん持ざん
まハ君「幸八さんの四死裏なら万事援目いあるまいが伴衣
ゆ代おびに出せ工風を語「そあらの前ハ只相信にお頼ひ申て
何かの相合代君「生ごゝ為本史ぢ夢称いふ事つぎにしお語

の耳に口伐奇整時さく如れ居たりけり
結て其翌日宗芳寺にて喪主傍が七回忌の追福を
覚え諸事ハ後たつが計ひにて喪主人が位牌に向ひ
てお猪が至し俺を述幸八濃深喪松をお民とお富
に近付とはしお猪ハタアア要人に遣て志かくかゆうと
徘徊と要人が云し事どもを落もなく相がたれば
並居る人々徘徊が其心あるをぞ打感しぬ。これなく
お富が喜び行にたとへんものもはし丈よりお猪お民

後たつ刑くに家路におりむれしが其夜要人ハ幸八
が拝へ来りて伴六を討づれて死りも他幸八が身の
なり出るまつぐき杯文さうるを話説に及びぬ其翌朝
幸八も後たつを誘引て他の端にいたり執討の日伐
翌の朝と定め伴六伐清り出もにハ志かくなりと
永し合せ翌の夜をとも待れけり

毬唄三人娘五編中巻了

毬唄三人娘五編下巻

江戸　松亭金水遺稿
山々亭有人校訂

第五回

「ヲイ〳〵伴さん〳〵久しく逢ねへの「誰ごとやア多義か。どうした「お前さん見えざア今ドやア佐々木の家来と菓と聟て。江陽目の岩水のせうふドやアないが。当世流の生存識で。お浦山吹日蔭のお茶ごと「自己も種々漂泊して暫時相生て機やの手代と任也ンで。そこでも半月と働いて。どうく今ドやア

作ゝ木の家来まに能ちやくまをば大体さがしこるまでやア
ねへ「ところが時てこんねへお前と自己は定だいと報次の
二人りと聖に出ひ諸へ迎って荒濡うとせるこ雨をもひかけな
く若侍に切まくられたうくこ人りは三場で寂滅実正なら
ば友達のよしこ飛ましても切合雨と生碎は本性遠まだ
深雪るまは志つくゐらア給もうんぎして逃出して口
の端とば拭てこが悪るまふ里を走のたと終まるまが
重役の耳にはいって二人りは追放上方筋とんざし。添

谷の宿ぐくおおに別まこく丁度今年は十年めざせ
「月日の立のは疾ものヨ添谷でおまて上州に四人年足と
止るうち夫ッ法そこの始から頼智と組んで欠落ヨ「自己も
京大坂とお行来こが中く法学でうんこ雪な宜女は見あこ
らないぜ「ところが妙なるまがあるものご今自己が組頭の笹
田要人といふ奴の女房は三時の始に瓜と二ッに割ぎて候ご
「吐」に吐ても乱がるるれそうしてまとぞうかしこのか「ごうか。
志ようこ種くに法とかいこが何分にも狂心の尚人がふ切んで。

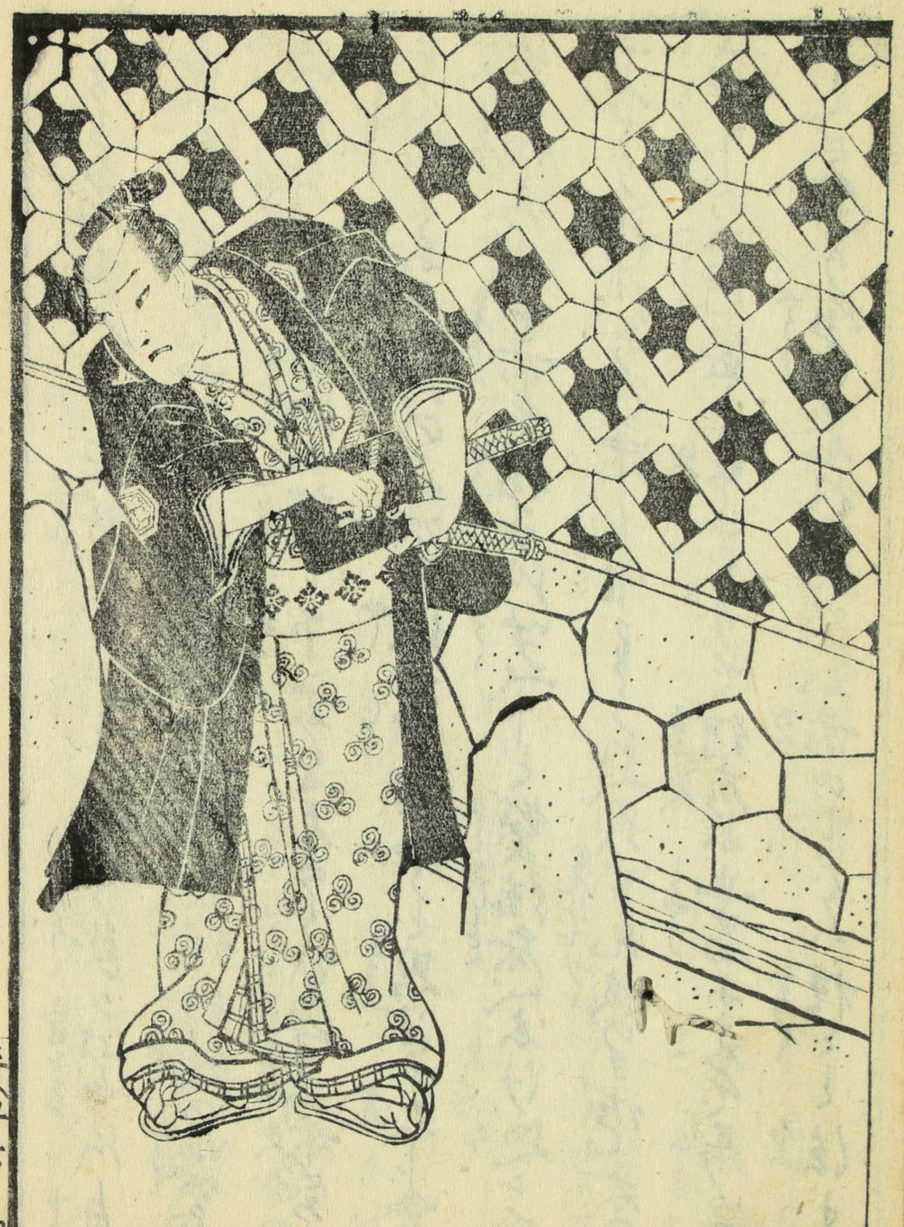
はじまらねへ「昔から今あつて女ふうけちやア女をい役者ヨ」まぜッ
けへをなさうして手おい何所へ往のご「何所と云ッて別に尚もねへが
昨夜ハ郭内へとゐるつもりごが。俳さん昔のよしそふまとし
ぢうり惜て呉ねへ「途中のるで持合も無ごろ呉を乱ッ
て無く呉ゆ」「るんごコリヤ夫歩かヲイ常識ぢやアねへ
夫分斗りの金がそしらてかおふ手をさげて頼むべら
棒があるものか「こゝらねへ奴ぢやアねへか途中のるで持合が
るいといふふ」「持合がるきやアのらひまをまれ」「ふ承知るト泊て

呉ゆ」「今夫歩ぢうりの月ニされ金ハいつ様へヤト大地へ手俳ゆ」「恐
体ねへ呉でも天ろの寂ぶ丈ド夢頭ぶ達者で居さう」「ヲイ
俳吉の名ゆ丈ド夢どうでも呉ねへナ呉られるき夢丈ていい詰
後悔をまるナ手前が呉ろう往所ハ池の端の俳吉が浮家の
お民の所ごろう何も彼も手前の心悪ハ本の屋愛へ
ぶちまけらア呉ゆく居夢がれ俳「ヤイ俳」「るんご俳とふナア
自己のるゆか俳「左右ヨあるさがねへ悪るゆ我いちゝ」おれさうへ
呉るゝ宜ろうぞ不肖でも負て無様へ」「どれ〳〵。ヤ。

コリヤ十両志かも二分金で二十郎有疾から切きうく出し夢
自己も否な文母銭いふ気もなるつさ 体「ごが。どこにて是前池
の端のお民が不へ往る銭知ひちるのぞ」「此夢をいふナ地の足
も地ざコウト待ナヨ。さうく十一日の夕がたダ。今もおれしが
いふ通り彼の渉艸で荒淫銭仕ようと云さアノ娘に生
家しといふ佛物が志かも二人聟ぞ来世を取りけ前の
佛物も十九か女才の半元服跡から往のハかし久気ハ薄らい
たが抱て寝る事多咎無其語から往聟ハ無銭おろして

ひろうなれが二人のうちの旦ざろう。どんな母良が此女銭月
由にまるかなんて母ろうと。いうざるお世話な語訪話の事から
踊銭付て来て池の端て下茶をもんさうびゃくりお前ざろう
を附すぐに中端の三次の役に出りけ母うと思ひさが支じ母ア
笠疾かろうを取で様子銭吹べしと髪結床へ志け込こで
すつかり程銭あげ母しさ唯ひろうれへの八半元彼のヨ作と木の
家中の四内室と云さざりで何方に此宿に来て居るの
かと。さつたり様子が志れるんざがお前のことだに程とと法も

よろんなし
をがみんらを
うらもどんな
むりでも
いふがよん
三ま寿



ないさが。えんじんの為人が不義知といふのですかりまりまして
伴「そんなら今日自己の出るの我▲「来利時らから行て居ましさ
伴「そりまア江若芳であつこナ史じまア家で別れまうと彼山下から
久留戸坂の方へ往んとなる曲角かし彼奴を乗りるし闇
まも光るだんびらを抜手も見せば切つく来べ▲「や。人殺くト
めがくを申らじと伴六が逃せ刀に肩先より乳の下かけく
切さく来べ。アツトだかりに息殺さり伴六ぞて懐中我さづりて
件の十両我を論してホツト息伴「コイツを。だらし世の中に

後臨いものへ相へ唯不思議のへお民か宅に綾たつが去後から
持出しさアノ刀飾り拘ごといふことだが。とうかなれ我也上さん
ものだ史にしても お為ならば見悔く来いとの手当さが気よい
逃事我をする事かあらん多分極刀を武士の魂と能云ッて
ものだ自己の腕でさへアノ今の併此刀也安国幸八ゆも
だんでんぐ。つゞいて此方もお拂ひ箱人をのろつゞ穴二ツ
と背の仁を。うまんる我いふものだト一人法ぶ申見あづくと
歩行た右に立ふさがり 深「めづらしや小源次桐生の法深を忘し

ハせはじ月已故に此年月の憂患雅相に至る大悪人
幸八「絶て久しき山住体吉我郎りの東玉行奮ひ取て去る
ハ銘次定の郎が両人と思ひの外に海が仕業丈有幾世の
拘思ひ。去るに今を去る十年のむかし海艸にて女をとら
へ荒淫に及ばんとなせ至而へ取り合せとゞせびなくも切
殺なせし悪者ハ則銘次定の郎の両人なりと呼ばる嬉
しさ不仮なりきと年頃日頃思ひし恵も変に晴
たりしや天命のがれぬ所。イデ玉行の有家代りしを

体「拘く変歓喉いり洪深に丈の歓なんぞと呼ばる覚着て
なれ亦玉行の一刀も盗し二人が海の手にかゝつて死ねば
月業月頃相残情べき覚ハねへ後「母ア比異なり小源次
聟喪ちゆを殺しける例に落散あつてる一刀名代なり
祢ど親くより譲りを請し我家の什物同附に失ぬ
たる我死骸の例に捨てりしハ我こそ人を殺せしといふね
もかりの月色が廉忽見でも色が練ずるか民「吾儕を
幸卿侍吉が後家とばかりに其をばしらねば先度引

出しにありし刀をとらる時顔色暫く違ての面を飾り物
と云語し史より五子の海光屋にて 語「宮僦にと後たち
さんが居る戒りて世ら俄の通り民「夕飯も子」にて俄に驚を
飛せて喚いても 同「いつもの根拳ゝ」暫て青菜に塗と首
うなだれ 喜「顔まも恥ぢお局さんに 同「仇嫌にき横さんが
自己が意戒かな「んと世名おいせのとならば宮僦も現在
兄の仇 律「十二兄の敵とハ民「宮僦おハ諸屋表ゑへが姫表
本郎ハ垂の姉 深「サア尋常に 皆「勝負く 律「彰なる

ゑハ何も彼も云て笑ましハ以前も大江廣元が歌 来吉
伯律吉と云者室の津の狂女に別深金につまりて
安田が飾りの玉行を奪ひ質入せんと思ひしにお鍋愛
しく史さへるゝ丙俄の猿倉在書役目の落度に幸
八ハ門前拂ひと笑氣係よさ後銀次定の節多
義なんどの朋友と彼渉菓の親世書に諸て喚る所ぞから
お諸と世らが姫へ祭りのうけくしいのに仙もうかれ定の印銀次
を玉にして踊へ旦ッて深さまんと思ふ面へ待あやもとこね

胄関に幸八海と家あらば臆病風に誘引まで
迎てさが今更口惜。積る悪事に屋浦は拂はれせんかと
ほしに緩たつが手代となりて居るうちにまたも法楽が色
番に迷ひんを見せど表右衛門といふ野戸の招拂はねまで
うちはと喚りをつけて名にしおふ熊谷悦で絵にぞつきり
まで附いかまも緩たつが大事にかけ一ト腰を無落なからも
業物と思ふがまゝに盗でしまた業物で表右衛門を尾よく
数しはあらしさが人や来るかとおどろかされ並て迎さが我誤ト

見より二編に二編に編にありし件「お結といひ法楽お家の我かけ
上我ものがたりてまたいふ也
女ら口おそ石家月己の仇歌丁乾サ余ゆて憎さが百倍イデ
玉行の切味我拭させんと云さ母に抜より疾く幸八に切て
うまれば身をひらき同じく知らぬと抜ち浮し皆附はいどこ
我ひしが素より手練の幸八に歌ふるものあたふべき。さぢく
くと信ぎ力になる我法楽が後より腰のつぶれを切つくまば
アウト斗りに伴六がよろめく所我幸八が肩ゐ我目がけ狗
打に志てうまれば昭もつゝ打たる方を思ひ手も大地へがり

投擲さり安田を。ソレト喜多郎に昭くだせるせば脊に負し
青松に波無路の一刀持添させて後ちつが親の敵と切法く
まづ三人の姉妹の一回に右ひだりより切付ける流石に敵の
伴六も大事の痛手にたまりかね空をつかんで七顆八倒雲八
母をうち伴六が前持るを一刀手に取ねげ月のありけるしてあまたび
押裁开が候並に青松が手伴持添て伴六の絶に過を判たりけり

第六回

かゝる折から案拘二挺いれせきさ入舁おろせばあづく出来る

笹田要人今一人は大江の近臣安田が一家同前を給はるより
幸八あ手伴実幸「要人猶のお計ひ易に尚りさく伴六伴
そ青兄とおびれ出し其尾熊本無伴とばくるのを見汚名
を信し身を行再度我手に戻りしからは主脇後に手渡し
なし悪人なからも人をあやめし其罪を此幸八が身に引請
んイザ山滝同伴こうむらん要「天晴なる山覚悟なから彼の
伴六が四悪伴敵にも深く憎ませなひ永の暇をなりたるうへ
武家を云さへ禁じられば当時無宿の伴六伴手にかけしとて

撲ひ返し能こそ討ち返しおよそ掴く「めづらしや妻八度そこ元
帳となる返し後彼伴吉多義先生金表にて出奏せ銀次定
あ鼻我語ひ淡州にて性来の姫我捕荒淫我なさんとしてこゝ
果さぬ劇定あり印銀次ハ其場に討れ伴吉多義ハ此異まも
迎ひ返しの事も度の聞に入るより即時の帳となりたりしが
踏まて度まも玉行の刀紛失返しとりしハまさしく是も伴吉が
仕業なるんと山心附山邊我遊ぶりなひを山後悔拒ばされ
先達て御先祖匡房の山堂忌にあたりなふ我もなく石

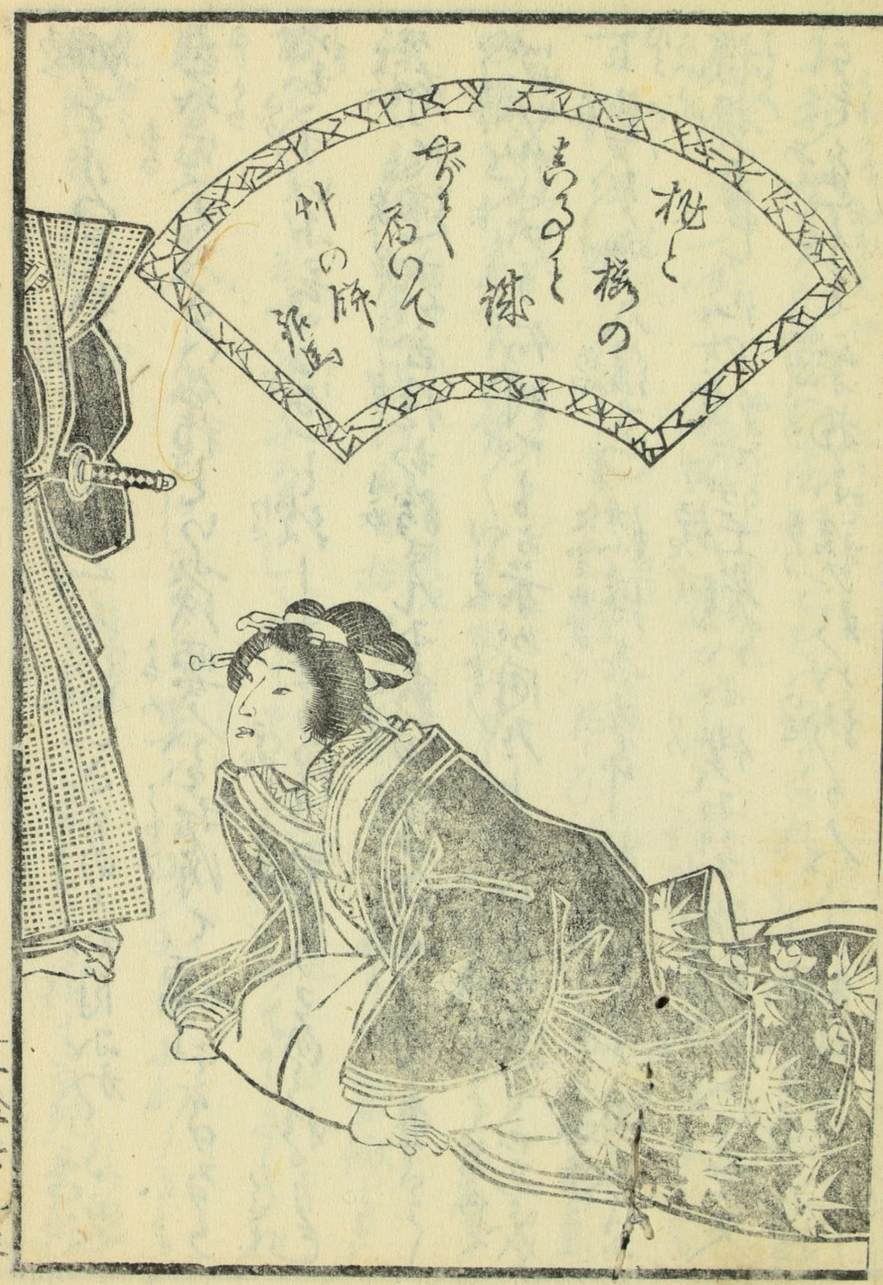
悔さんとお金表へ生るの仰出されしが其所山邊ハ何まさふ
なりしか為て行来の志れざれハ力及ばて止ましが笹田氏
とハ故なりて山熊主我むしてびしより山邊のる我拘がる事
山心尚もいへバとお粮之中せし詞をハ反言ふなされ此時の
物集宅へ山賊あつて無りくと此るの数山辺に遊ける
一伍一什を拘語られ縁ふつながる身の紙今の名ハ黒山
伴六彼曲者我討ちはし此るの度まも密く吹えあげ見分
として要人度と山岡伴ふ　幸「重く尊れ要人格の山伴ひ

自己滅忤まで切殺せし彼の商人を以ゐるれば胥害なり
とて古傳奉と志らで討しは是のこゝが我一生の誤なれ主「サ
歎かれぞ幸八度彼西行を盗まずとも同類なると分明にて
後に不忠の曲者なれば計らずに討て公の手我偽ざるが太
美のひとつ自己は是より立帰り此より殿へ言上なし日あらば
本地をやさるべき西海沽有しとも時に彼西行を持来ヨ
幸「コハ那立を出立べ西荒よしなに御挑戦主「お軽くなりても
一度のよし身自己まで能に推挙せん幸「是まで中しを

如何なれど是なる女が悪妻まで名を給と中者トいふに
お給もに志り出給「たらまぬ者也へ此来とも御同かけられて
ト志と母かに也へば主猶もうなづきて御給ひしじめ一同へ
初見来の挨拶とて胥の手柄を手柄に演述なして要人に
匂ひ主「隠く厚き西紀恵まで武士一人を切ることを人も
さこそ満足なるらん自己はお先へお帰中さん要「痛入る西掛
拶ゆ地へ帰来し取られば拙者にお力とも後先主相
西掛手次第にお引取とト「志らべ西発ト云さ母に駕

に斯業大江家の座敷へこそ帰りけれ後に要人をまねきを
見送り要「イヤナニ安田氏悪人ながら律六を附ありとも
一ツ縁故給しけしとは己顔ハ常ひるさせんと必の放用意
の桶を持来せり貴くいふに思ふるや後「当様へどうぞ貴う
様ど御経御意出の御夜掛十二番がござりませう氏「宿徹ど宜へ
夜はけるく御世話に成りしるもありながら知てやさらば
罪有らうぞんじ升去ゆしながら要人へ是非に御目にかゝるも
面目なきしかど恋しき洞の為遠からず御相も見え失れ

姉をもつてお詫を申上るはしさのゝお目にかゝる其文
主人宅へも入らん種といふ残要人を打消て要「それはなら
べきこと申いふに言ふと返しを致しませう詫る方よりこびへわかりし
が却て迷惑御糖御嬢さんに委細の子細咄して聞てござく
聞すならうか何時にも御旅が同道して御留を連て出立ば
下見より登八後右の流深香喜郎御嬢さんど請取く
挨拶為し彼の律六が己罷いに僕に云附横に入させ又
こそ逢んと業物に移りべ給ふ人々を御民に直へ一同


枕と
桜の
まるまと
謀
だく
居りて
州の所

不言歌を止宿なしたりなり
結局吏より四五日後大江家より妙法有て安田
幸八郎猶諸とも至猶方へ引戦日あらば目見へも
願しかば父が本地代安城しく名も改て惣左衛
孝義と号し近習の列にぞ入りにける命が流深は幸
八が至猶が許に往たる日より綾左衛が猶宿に在しが
ゆゑ要人が猶宿の下ぐ喜松を名前人としく
喜松を申に諸事を願ひ前は綾左衛がこゝろ此にて再度

猶屋喜三人の腹羞代かけて勘田のまさりへ異彼店
とひらば屋浦方へ要人を猶抔より仲手代求て出
入を乞しかば千葉岡山和田熊谷をえじめとして数多の
得意も出来しかば以前に悔る繁華となるにつけてハ
手代に僕の十人ばかりも抱へしかば流深が相談相手に
とて御民を喜三郎と姫合せんと綾左衛よりも此事
進しかば此じめの程は夫妻を追ド抔といふこしかど
親方の名跡代立んが為に甥の後見するをいかでか

偽者も赦びこそすれ昭まんと理屋して進めしかへ
終にこれ為に隨ひて此の端を身子に讓り去る事と
吏婦になりしかへ其ハ去る事 奥ハ御氏と万事を後見
なしたりければ爲家屬業なり吏より前に要人の方
にハ彼の久麿が不快にて荷物さへも冥べさりしが得に
取ての僥倖にて再度階老の勢出かゝぼ有りなれ
うちに彼機が三年の苦界も果しかば要人が許にし
取りて妻となせどお屬とのこと事 至て睦事殺お屬ハ

これ彼婦と殺ひ彼機をも人とかしづ兄弟に男
如の子彼まうけ三家いよく業なるとぞ

作者曰
子代武勇を此じめとして深の脇にかゝる尾を墨ぶ
所を拾遺となしてく宥宮も此事あられし鞠の後
宮嬌泰院が政談を天命院に仮用しく這もまた
又編代大尾とし法ぐいて出板以ささもべく相も
替らば法高諫事希上方

五編六回の結局ハいと入組し端の多く読人まどハ
さしかゝりんとて弄が月割を左ニ志るす也

一三月四日　伴六お民をすゝめして病気といひなし　きうにお富を呼よせし其夜之一三同五日　伴六米次郎お民が宅へ来り弁妙院の助に出会し此事を談合　あふさざれども花又ニかりといふを此月の昼過之一三同十一日　お富お民の二人をとふらひ伴六
にハ一三同十二日　お孫三浦屋へ入りし日なり一三同十二日　おやす後家の幸吉并お民が宅へ至りて要人ニ対面し此日なり一同十五日　これも本文ニの色されたる宗養寺にて法事中道
宗三郎のまつりを此お民が家をいたみ候由なり一同十六日　要人大江の中次へ入り今宵ニ金を受く幸八が甚だ殿所で　幸八の下屋敷ぐらしと幸八がお富ニ
伴六お民くのまうれしき宿にてかれた近づ
逃し後ろぐ十七日と植をハ此至庭なり

一同十七日　例の仇うちハ此夜おゐて主従が安田幸八主従が宅へ
かけつけ一同廿三日　幸八本郷殿安信候を此日なり一同廿一日
廣元へ来上せし日なり一同廿八日　お富が要人のうらく
お婦が殺後家が諸宿へ一同廿八日　要人後家の結尾の蔵ぢ成にんと
引退し八此日なり　お後有し八此の日なり
一四月五日　要人数田多治町へ再度異拔一同十日　此日後家の一下先
三世代ひらきし八此の日なり　お行へ帰り同廿日出前す
一同十五日　後家この年季一同廿五日　後家要人の宅へ一同廿八日
引しとの日なり　引退しハ此の日なり
おかくと表向ゆと
えんの
婚姻あり八此の日之

毬唄三人娘五編下巻了